

史上未曾有の巨大都市と化した東京。

中でも渋谷・新宿・池袋という副都心地域は、戦後飛躍的な発展を遂げたのは周知のことである。ある時期、全国の駅別乗車人員の1位から3位をこの3つの街で独占していたのも発展の証しであろう。

その中で渋谷は、大学は國學院大學に通い、卒業とともに同大学に奉職した私にとつて、半世紀にわたり通つたなじみ深い街である。プラネタリウムのドームがあつた東急文化会館。東急東横線渋谷駅の蒲鉾型屋根。さらに以前は、宮益坂と明治通りに都電、道玄坂には玉電が走つており、街の変わり様も目にしてきた。

その渋谷もご存じのとおり、現在は世紀の大再開発中である。新しい高層ビル「渋谷ヒカリエ」の竣工や東横線の地下化に始まり、渋谷の中央部ともいえるデパートビルが新築のため解体中である。高層ビルの少なかったこの街も、完成予定の2027年までに新たに3棟の高層ビルが林立すること。また、地下に広場を設け、そこが渋谷のターミナルになる



## 街の再開発、 大学の再開発

と聞く。メディアなどでも50年・100年に一度の大開発といっているようだが、完成を目にするまでは、想像もつかない。

この渋谷の大開発に先んじて、本学の渋谷キャンパスも再開発を実施した。今年で創立133年を迎える本学は、設立当初は飯田橋に立地し、1923（大正12）年に渋谷に移転。その後、渋谷の地で3回の建て直しを経て現在のキャンパスに至っている。2002年の創立120周年を機に「広く社会に開かれた都市型大学と安全で快適なキャンパス」をめざして再開発に着手し、今年4月末でおおよその完成を見た。当初から計画の責任者として携わった身としては、感無量である。

阪神淡路大震災後、新耐震基準が改めて注目されている。日本という地震大国に立地する限り、耐震は必須の課題であり、本学の再開発もこれが端緒となった。渋谷にある狭隘なキャンパスをいかに有効利用し、その上で学生・教職員が満足するキャンパスとなり得るか。そして、

その資金をどうするか。また、新校地への移転ではないので、校舎の建て替えはローリング・プランにせざるを得ず、教室および研究室の数を確保しながらの解体・建設工事が必須となる。当然ながら、近隣住民のご理解を得ずには開発は実施できず、説明会を開催するなど、多くの課題をこなしながら再開発事業に着手した。

13年にわたる再開発の末に、渋谷キャンパスは全面リニューアルを見た。刷新された渋谷キャンパスは、私の母校としての郷愁に浸れない面も多々あり、同感の卒業生も少なくないであろう。しかし、先述の耐震の問題だけではなく、限りある校地を最大限に活用し、良質な教育・研究を提供・発信するためにも、教職員一体となってこの結果へと導く必要があったのである。現に、再開発によって新たに開館した「國學院大學博物館」は、本学学術資産の展示はもちろんのこと、研究成果を発信する施設ともなっただけでなく、ここを中核として近隣の美術館などとの連携を強化して「ミュージアム

## 坂口 吉一 ● 学校法人國學院大學理事長

連携事業」を実施している。再開発の結果、建物の利便性だけではなく、内面的成果の実績も十分に見受けられるのである。本学の象徴である神殿の前庭には、「神奈備川」の清らかな流れとともに、文化功労者澄川喜一先生の制作による天に伸びるモニュメント「翔」の姿があり、本学の理念をも標榜している。開放されたキャンパスは、近隣の皆様にも憩いの場を提供している。

渋谷の街に目を戻すと、私自身、懐旧の念を抱く間もなく再開発の勢いは止まらず日々様相を変えていく。開発途中は不便も多々あるが、完成時には利便性の高い新たな街の誕生が至極当然のことであり、ここを基盤にした新たな渋谷の文化が生まれるであろう。本学の再開発に携わった一人として、渋谷の未来にも希望を託す思いは強く、新たなキャンパスと、その立地する新たな街が、ともに発展していくことを祈念するばかりである。